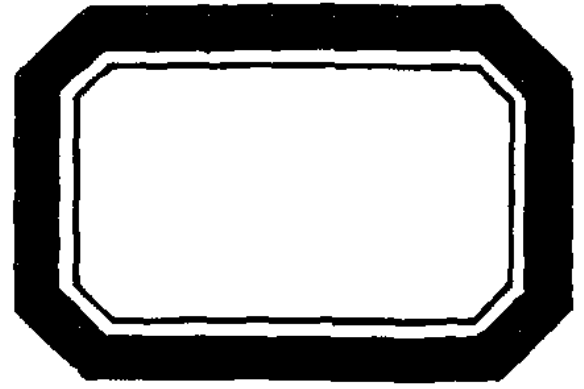


林 真理子

ミカドの淑女

おんな

新潮文庫



ミカドの

新潮文庫

は - 18 - 3



平成五年七月二十五日 発行

著者 林 眞理子 はやし まりこ

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
営業部(〇三)三二六六―五一
電話 編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社
© Mariko Hayashi 1990 Printed in Japan

ISBN4-10-119113-1 C0193

文 庫

ミカドの^{おんな}淑女

林 真理子 著



新 潮 社 販

5094

ミ
カ
ド
の
淑^お
女^{んな}

明治四十年二月二十三日

夜明け少し前に、帝は^{みかど}お目覚めになった。

このところ、深くお眠りになることは少ない。側近の者は誰でも言うことだが、二年前の日露戦争のご苦労は、帝のからだに深く刻まれていた。あれほど好きだった乗馬もあまりなさらず、静かに蓄音機を聞かれることが多い。なさることに、大儀なご様子が多く見られるのだ。

火の気の無い御寝所の空気は暗く冷たく、帝ははつきりと目を覚まされた。十五畳ほどの日本間である。大きな寝台の他はこれといったものもない。内裏はあらゆるところ、闇と寒さが野放図に横たわっている。帝がお寝^{やす}みになるところも例外ではなかった。

これからご起床になるまでの長さを思うと、帝は大層憂鬱^{ゆううつ}になられる。けれどもどうする

こともできない。内裏の朝というのは、帝がお目覚めになる六時と決められているのだ。すべての女官の齒車が、その時から動き出す。お髪をとかす女、洗面のお湯を運ぶ女、そしてその女に仕える大勢の婢たちが、一分も狂いのないよう心を砕いている。

そしてそういう仕組みをつくったのは、厳格な御氣性で知られる帝御自身なのだ。

女たちのために帝はゆつくりと目を閉じられる。耐えがたいほどの寒さを、夢の中に塗り込めるためもあった。

その時だ。帝は女のしわぶきを聞いた。あたりをはばかりようなひそやかな音だったが、帝の耳ははつきりとそれをとらえた。園祥子権典侍だった。皇太子をおあげになった柳原愛子典侍は別格として、帝には現在権典侍という名の三人の愛妾がいらつしやる。けれども御寝台の近くに侍って宿直するのは、最近では小倉文子か園祥子に限られていた。

今夜の当番である祥子は、こらえきれぬようにもう一度咳をする。

この女も年とったものだ、と、帝は祥子の顔をゆつくりと思いうかべられた。たつぷりとした黒髪と、やや皮肉そうな唇を持ったこの女官を、若い頃は大層可愛がられたものだ。今のようにただ傍で休むのではなく、祥子は毎夜のように御寝台の上にあがった。御寵愛が深かった証に、祥子は次々と八人の御子を生んだほどである。

特に明治二十年の猷仁親王御誕生の時は、やっとお育ちになりそうだと宮廷中が喜んだものだ。けれども翌年には、あつけなくお亡くなりになった。その後も御運は悪くて、明治十

九年の静子内親王を含めると、四人の御子を失くされたことになる。うまく育てば皇子の御生母さまと呼ばれた祥子のことを、帝はふと憐れにおぼしめした。

やがて若い日の祥子を思い描く暇の裏側に、ほんのりと白味が漂ってきた。どうやら夜明けが近づいているらしい。宮中の奥深くにも朝の陽は射してくる。

もう少し眠らねばならない、と帝はご自分に言いきかせる。そのために下々の者もするようなことをなさろうとした。記憶の中から、楽し気な、そして深く考えずにすむようなことを抽出されようとしたのだ。

幼ない頃すごした京都御所のありさまを、帝はお選びになる。お髪を稚児髷にし、縫いのお振袖というまるで姫君と同じ格好をなさったものだ。あの頃はお側近くに中山局が必ず控え、あれこれと帝のお世話をやいた。手習いの相手も、御生母さまが自らなさったのだ。薄い闇の中で思いをこらすと、中山局の濃い白粉のにおいが香ってくるような気さえする。その横には、墨を一心にする女官の室町清子、御乳人の梨木持子がいた。

当時の宮廷は幕府によって、不如意な生活を強いられていたが、それだからこそ、少人数でびったり寄り添って生きていくようなところがあった。儲君と呼ばれた帝には、中山局以外に、たった四人しかお仕えする者がいなかったが、何の不自由もお感じにはならなかったものだ。

それが今ではどうだろう。内裏には数えきれないほどの女がひしめいている。もつとも帝

のお目につくところにいる高等女官の数は限られているが、それでも大変な人数だ。帝は初めて御子を生んだ葉室光子の顔を思い出された。あれは明治六年のことだ。御誕生になった男の御子はその日にお亡くなりになった。二カ月後には橋本夏子が女の御子をおあげになったが、その方も同じで、内親王と称号がつかない間に薨去された。

光子、夏子と青春時代を共に過ごすしになられた女性の顔を懐かしくおぼしめした時だ。帝の中に不意にうかびあがってきた女がいた。やわらかい頬と、黒目がちの細い目を持ったひとりの女官だ。

これはどうしたことだろうと、帝はいぶかしくお思いになる。彼女は光子や夏子と違い、純粹な女官であつた。一度も寵を賜わったことがない。出仕したのも、三十五年も前のことである。その女がどうして、帝の朝の思いの中に登場してくるのか。

臉を深く閉じて、お気持ちを集中される。するとひとつの情景がゆつくりと帝の記憶の底から立ち上がり、やがてかたちを整えた。

ああ、そうであつたと、帝は深呼吸なされる。あれは十日ほど前の紀元節宴会であつた。伊藤博文、田中光顯など高位高官が居並ぶ中、正四位の名士の彼女も臨席を許されていたのである。

赤紫色のびろうどの礼服に身をつつんで、いやがおうでも人々の視線を集めていた。そうでなくとも目立つ女なのだ。

退出なさる時、帝はほんの一瞬であつたが、最敬礼してお見送りする彼女に目をとめられた。立衿たちえりのチュールレースがあまりにもたつぷりした量で、その年齢の女にはそぐわないような気がされたのである。

あれが近頃流行のかたちなのだろうか。帝はふと、傍にいた女官にお聞きになりたいような思いにとらわれたが、もちろんおやめになった。

老いてくると、ささいな疑問や気にとめられたことが、心のどこかに巣くつてしまう。そして本人も気づかないうちに、意外な大きさとなり、何かの拍子にこぼれ落ちてくるものだ。彼女の顔がうかんだのは、そのために違いない。

やっと原因をつきとめられた帝は、もう一度深い呼吸をなさった。

そしてこの小さな安堵あんどが引き金となつて、帝は再び眠りの中に入つていかれた。

「おひるでございます」

祥子の声に、帝は頷うなずかれる。絹羽二重の寝巻きの帝が半身を起こされると、それを合図に、祥子は「おひる」、帝がお目覚めになられたと声をあげる。

高倉寿子かずこ女官長や柳原愛子といった典侍のところには真先に告げられる。

「申しよー、おひるでおじゃーと、申させ給たまう」

ご膳掛ぜんりは今度は、もう少し位が下の女官の方へ進む。

「申しよー、おひるでおじゃーと」

身分の上下がすべてのお局の中では、ふれ言葉ひとつにも歴然とした違いがあった。侍医の拝診が終わると、様子らの手によって帝は朝のみづくろいをおすませになる。

内裏の冬の朝は大層暗い。帝のおぼしめしで電気を使われないからだ。何年か前に衆議院で漏電による火事があった。その際、もしも電燈でんとうをつけて、お側近くから火が出れば国民に申しわけがたたぬと帝はおっしゃり、人々は感涙にむせんものだ。

西洋蠟燭ろうそくをつけたシャンデリアの下、帝は白羽二重のままおすすみになる。蠟燭をつけるのは夜と決められていたが、このような冬の早朝は、何かあかりがなければ朝食をとることもできない。

帝は毎朝牛乳入りの珈琲コーヒー、バターとジャムを塗ったパンをお召し上がりになる。おからだのご立派なわりには、そうたくさんはお口にいけないのが、女官たちには残念だった。

この時、愛犬の花と六が走ってきて、帝の膝ひざに手をかける。時々はお飲みになる牛乳をねだつて、くうんくうんと鳴いたりもする。帝にこのような不作法を働くのは、この者たちだけなのだが、帝は笑ってお許しになった。

この後、しばらく居間でくつろがれ、皇后の朝の挨拶あいさつをお受けになった後、いよいよ表御座所にお出ましになる。この時間も十時半と決められていた。

帝の厳格な御気性はお年とともにますます強くなつていかれるようで、このあいだも御寝

所の襖ふすまを開けにくる女官の時間が、何分か狂ったと叱しかられたばかりだ。

第二艦隊司令長官にして海軍中将伊集院五郎いじゅういんごろうは、御座所にて帝をお待ち申し上げていた。筑波つくばと千歳ちとせの二艦が、アメリカ合衆国に招請され、バージニア州ハンプトン・ローズにおける万国陸海軍祝典に参列することになった。それを御報告するためである。

帝はこれをことのほか喜ばれ、伊集院に励ましのお言葉をかけたばかりでなく、二艦に対して酒肴料しゅこりょうを賜わった。

感激した伊集院が退出した後、帝はしばらく新聞をご覧になる。報知や東京日日ばかりでなく、福岡日日など地方紙も入れて、それは三十種類にもものぼった。新聞を拡げひろげられると、インクの香りより、消毒のにおいの方が、まずつんとお鼻にくるが、帝はお気になさらない。帝がお手に触れそうなものはすべて念入りに消毒されているので、このにおいには慣れていらっしやるのだ。

やがてお昼近くになった頃だ。帝は足にぶい疲れをお感じになった。このところ御公務についておられる最中も、この足のたるさは何度もやってくる。幼ない頃から寒中でも、りんとして動かない躰しづけを受けた帝であるから、こういうことは大層齒がゆくも、情けなくも思われる。

あわててお伴申し上げようとする徳大寺実則とくだいじさねのり侍従長を手で制して、帝は立ち上がられた。廊下をほんの五、六分軽く歩くだけでいいのだ。手を後ろに組み、窓から御所の庭を眺めら

れたりする帝の後ろ姿には、あたりをはばかりるようなご様子があつて、お側の者たちもこの時は自然と遠ざかるようにご配慮申し上げた。

御座所を右に出て、内謁見所に進もうとなさつた帝は、ふと気が変わられてまっすぐにお歩きになった。廊下の片側は侍従の詰所や侍従の食堂が並んでいる。お若い頃は、ここにお気軽に姿を現わして、側近たちと酒を召し上がったこともある。

笑い声を突然お聞きになった。若々しいというより子どもじみたその声は実に遠慮がなく、宮中では最もはばかりられるような類のものであつた。ふつう帝がいらつしやる時刻に、こんなふうにな作法なことはいらないものである。

お咎めになるつもりはなかつたが、帝はそこで足を止められた。

「下田歌子女史——」

とその声のひとつは言つた。

「ご乱行で——」

続く言葉も、宮廷には全くふさわしくないものであつた。また笑い声が起こる。

帝はドアをお開けになつた。

「どうしたのだ。そんなに笑つて」

予想どおり、岡崎泰光、坊城俊良らが中にはいた。侍従職出仕のまだ十五、六の少年たちである。公卿の子弟である彼らは、ほんの子どもの時に出仕したので、多分にやんちゃなと

ころが残っている。だが、突然帝がおでましになった驚きは彼らを完全にうちのめしたように、すぐにお答えすることもできず、かすかに震えているだけだ。

帝は岡崎の持っているものに目をとめられた。新聞ということはすぐにわかったが、ふだんお読みになっているものとは、活字の感じが違っている。なにかひどく粗雑な紙質だった。そのままうち捨てておこうとも思われたのだが、少年たちの発した言葉には、聞きずてならないものがあつた。

「下田歌子」「ご乱行」。少年たちは確かにそう言ったのだ。

「それを見せよ」

帝は言われた。手など出さなくともよい、帝がそうおっしゃったなら、それは絶対命令なのだ。

「これは……」

岡崎の声はかすれている。

「これは下品なもので、聖上おかみがご覧になるようなものではございません」
「いいから、見せよ」

平民新聞とあつた。帝はたいいていの新聞はご覧になっていたが、社会主義などという危険思想を唱えるこの種類のものに触れられるのは初めてだった。

恐懼きょうくして頭を下げる少年たちをそのままに、帝は御座所にお戻りになった。消毒のにおい

が全くしないその新聞は、ところどころに目新しい単語が並んでいる。その中でもひとときわ目をひいたのは、「妖婦下田歌子!!!」という文字であつた。この名前を帝は感慨深くご覧になる。今日の明け方、あまりにも唐突にこの女のことを思い出した。それも何かの因縁だつたのだろうか、目をおこらしになつた。

妖婦下田歌子!!!

罪惡の下必ず女子ありとや、罪の子として冷酷なる人類に鞭たる者、者は嘗ては之れ天使の如き者なりしよ、櫻花の如き美貌と熱火の如き感情に過られて虚榮の惡酒に酔ひ、權勢の果實に狂し、其の十五年の年に於て初めて歡喜の生涯の幕を開いて得意と傲慢と悲哀と恨愁の歴史を送つて、漸く秋風橋頭白髪を歎ずるの時來らんとする下田歌子よ、彼女の一瞬に惱殺され、彼女の掌裡に翻弄せられたる者抑も幾人ぞ、彼女を傷けたる色魔狂は曰く伊藤博文、井上馨、土方久元、山縣有朋、彼女が玩びたる情夫は曰く黒田長成、秋山定輔、望月小太郎、田中光顯、林田龜太郎、三島通良、多情を經とし多恨を緯とする者は彼女の歴史也、生涯也、吾人は今日の女學生が理想して措かざる下田歌子を、一個の妖婦とし毒婦として爬剔抉し、彼女の満身をして完膚なからしめんとす只憾むらくは記者は爛錦を裁ち

美花^{びか}を摘^つむの伎倆^{ぎれう}を有^{いう}せず、然^{しか}れども只正直^{ただせうぢき}に大膽^{だいたん}に彼女^{かのぢよ}の面影^{めんえい}を描^{えが}き出^{いだ}して讀^{どく}者^{しや}をして戰慄^{せんりつ}せしめんを期^きす

明・廿四日・の紙上より連載

帝のそれまでのご生涯において、これほど下品な文章は目にされたことがなかった。もの珍しきから、繰り返し読まれたほどだ。こんなものを宮廷の御座所近くに持ち込むのではないと、岡崎らを叱り、自らの手で破り捨てさせようとも思われた。けれども、心に残りになることがいくつもある。

そこに列記された重臣たちの名前だ。

伊藤博文と山縣有朋^{やまがたありとも}の名さえあるではないか。

帝の前にあがると、どれほどの高官、將軍も緊張のためにからだが震える。冬でもびつしよりと汗をかく。けれども例外が四人だけいた。有栖川宮威仁親王^{ありすがわのみやたけひと}と、この月の一日に學習院院長となつた乃木希典^{のぎまれすけ}、そして伊藤博文と山縣有朋であつた。有栖川宮親王を別にすると、伊藤、山縣は椅子^{いす}に座ることを許されたたった二人の臣下である。

謹厳実直な人物で知られる乃木は、すすめられてもきつと辞退したのであろうが、とにかくこの二人は、互いに椅子に座つたまま帝と言葉をかわせる寵臣^{ちやうしん}なのである。そんな彼らが、